

同心和合「和合・親しみ合う」し「一味同心」であることの大切さ

平成二十八年二月二十五日 於加茂法話会

管長 江川辰三 年頭の挨拶のお言葉に

「私たちは誓願をもって、苦難の人々に寄り添い、共に未来を信じて歩み続けなければなりません。同心和合をもって共に精進を重ねましょう」

「同心」とは、同志が互いに尊敬し合っていく心にほかならないのです、異体同心の和合といえます。

高祖道元禪師さまは、仏道修行するにあたっては、「相互に慈愛の念を持ち、また自を顧み他にこのころを寄せて行じなくてはならない。」「願・・・振り返って見る・思いめぐらす願問」

太祖瑩山禪師さまも「和合」のこのころの大切さを絶えず人びとに説示されました。

それは修行弁道の世界のみならず、人と人との関係においても必ずこのころを重んずるようにと示されました。そしてお互いに仲よく力を合わせて仏法を盛んにしていかなければならないとご教示になりました。

「正法眼藏随聞記（しようぼうげんぞうずいもんき）」という私たち曹洞宗の僧侶であれば誰もが生き方や修行の拠り所としている宗祖道元禪師の弟子孤雲懐奘（こうんえいじょう・永平寺二祖）様の遺された著書があります。

道元禪師ご在世の時、禪師のおそばにいて身のお世話をされていて、常日頃の修行や生活の中で、お師匠様の言われることを、聞くに随ってメモ的に記述されたものですから「随聞記（ずいもんき）」というわけです。

その中に「学道の用心は和敬同心（わけいどうしん）にあり」とご教示があります。

「在家の人でさえ、家を保ち、城を守るのに、心一つにしないと、ついには亡びてしまうと云っている。ましてや、出家の仏弟子は、一人の師匠のもとで、水と乳がとけ合ったようなものである。また、六和敬という法もある。めいめいが個人の部屋を持って、心もからだも互いにへだてて、各自思い思いに仏道を学ぼうと心がけてはならない。一師のもとでの学道は、一つの船に乗って海を渡るようなものである。心を同じくし、行、住、坐、臥を同じくし互いに悪いところは注意しあい、よいところはとりあって、同じように仏道を学ぶべきである。

これが仏在世の当時から行ってきたやり方である」（水野弥穂子訳）

自と他のありようは、他を斥けることなく、自らも殺すことなく、限りなく共に生きることを願うことです。そして共に理想の境地に進むようにしなければいけないと、お釈迦さまは教えられました。

口と心と体のバランス・自分と他人・社会のバランス・

自分本位・エゴ・いじめ・差別・偏見・自死等の問題の根底に人を思いやる心が薄くなってきた。

六和敬（六つの心をおだやかにして慎み、相手を敬うこと）

①身 and 敬・礼拝などを同じくすること。②口 and 敬・讃詠（さんえい）などを同じくすること。

③意 and 敬・信心などを同じくすること。④戒 and 敬・清らかな戒を同じくすること。

⑤見 and 敬・見解を同じくすること。⑥利 and 敬・夜食などの利を同じくすること。行 and 敬とも。